

12 公開特許公報 (A)

昭55-50217

Int. Cl.
G 02 C 11.00

識別記号

内整理番号
7174-2H

公開 昭和55年(1980)4月11日

発明の数 1
審査請求 未請求

(全 5 頁)

製眼鏡

-402

出願人 德田昭

東京都渋谷区代々木5-15-10

21特願 昭53-123661

-402

22出願 昭53(1978)10月9日

代理人 弁理士 松下義勝 外2名

23発明者 德田昭

東京都渋谷区代々木5-15-10

明細書

1. 発明の名称

製眼鏡

2. 特許請求の範囲

該鏡フレームの少なくとも一部内に着用された元鏡体を長着させて反ることを専意とする眼鏡。

3. 発明の詳細な説明

本発明は、眼鏡、特に、疲れ眼等の治療に好適であり、しかも、人体に適用されたときにも、ほとんど誤がつかれることのない眼鏡に係る。

最近、新しい医学として磁気医学が脚光を浴び、とくに磁気医学は、磁気と生体反応との関係は研究され、それにもとづいて磁気の効用を生体の治療等に適用することが行なわれている。

また、現在の磁気医学を大別すると、その適用対象から、直要に磁気を治療手段として人体等に適用するものと、磁力等としての磁性体を人間の病気等の観察手段として用いることとに分けられる。

また、最近は、このような磁気医学の研究の反対のつとつて、種々の磁気医療器具が開発され、これら器具の中には、その効果があまり確められていないものも見受けられるが、既定の医学的効果がすでに立証されているものもある。

例えば、既定の医学的効果が立証されている磁気治療器具としては種々のものが提案実施されているが、その中で、磁気ペンドと称する輪輪、磁石、磁石、くび掛け等が最も普及されていると云える。これらの器具は何れも人体中の血液の循環性の向上を目的としたものであつて、血液分子がイオン化して運動しているため、外から磁気を与えることによつて血管中に種々な電流を流して脈動し、血液の循環性を向上させるものである。このため、人体の一端に磁力等の磁性体を長着すれば、それによつて血管の周囲に血場が形成するため、その血管中を運動する血液には、力が与えられ、血液の循環性が向上し、肩こりや、その他の病気等がおそれ

るとされている。

しかしながら、従来例では、上記の鋼板等の治具に適用されるものは提案実施されているが、最も日常にひいて使用する眼の保全、治療に關するものは提案されていない。

すなわち、一般に近視、遠視等には眼鏡の使用によつて視力を正視状態に保持することが行なわれているが、最近は、眼鏡のファンクション化によつてなるべく薄いフレームや、審美的デザインのフレーム等が提案実施されている。このため、疲れ眼の場合等に、この眼鏡の一員に磁性体等を装着することが行なわれているが、外見が損なわれ、实用に供することが困難である。

また、眼鏡の眼鏡部分を磁性体によつて環状に成形することも考えられる。この点、従来から、既その他磁性材料に磁性を附した指輪や磁性錠等を組込んだ首かざり等が知られているが、前者の指輪は、既その他釘板を円若しくねだ円状に成形し、それを着磁して磁性を附

(3)

以下、図面によつて本発明の実施原様について説明する。

まず、第1図ならびに第2図はそれぞれ本発明C一つの実施例に係る眼鏡の斜視図であつて、第1図ならびに第2図において、符号1は眼鏡部、2はつるを示し、通常の眼鏡と同様に、2つの眼鏡部1とつる2とから眼鏡フレームは成つて、このフレームの各眼鏡部1にはそれぞれレンズ3がはめ込まれて構成されている。

次に、上記構成に係る眼鏡フレームの少々とも一部の中に、着磁された充填体5を取り付ける。この充填体5は眼鏡フレームの外部に露出しないよう構成する。

すなわち、第3図は一つの眼鏡部1の斜視図である。この場合は、眼鏡部1は外装チューブの如き包囲体1'2と充填体5とから成つて、このチューブ1'2は、通常の眼鏡と同様に、金、銀、純その他の延展性に優れる金属から構成すれば十分である。一般に、眼鏡は、通常の指輪等の装身具と同様にファンクション化傾向が

(5)

したものであつて、大きな磁性を附するために、通常は、材質そのものをフェライトその他の磁性体から構成されている。しかしながら、そのような磁性体では一般に加工性が劣り、鍛造する以外は、円若しくはだ円状に加工成形することは困難であり、外観に優れ、眼鏡部分となりうる磁性体を構成することができない。これに対し、外観や加工性に優れ耐候性を持つ素材を用い、だ円若しくは円に成形し、その後、磁性を附しても、例えば皮脂錠等では附される出庄に割れされ、乍ら目立つ初糸の大きいものが得られない。

本発明は、上記欠点の解決を目的とし、とくに、眼鏡フレームの中に、少なくとも一部が着磁された元模体を嵌め込んで成つて、外観が全く損なわれることなく、耐候性に優れる眼鏡を提案する。

すなわち、本発明は、眼鏡フレームの少なくとも一部内に着磁された元模体を被覆させて成ることを特徴とする。

(4)

大きく、とくに、外周のチューブ1'2は、美術的要求が大きく、更に、人体の一部に常に接近若しくは接触するため、通常は、汗、その他影響をうけ、耐食性に優ることが要求される。このため、眼鏡フレームは、金、銀、プラチナその他の貴金属から構成するのが好ましい。このため、本発明においてもチューブ1'2は貴金属から構成し、この中に充填体5を組合わせて眼鏡フレームを構成する。

また、このように外装チューブ1'2の中に充填体5を嵌め込んで、この充填体5の少なくとも一部は露出して磁性を附する場合に、充填体5にはなるべく大きな磁性が与えられることが好ましい。このために、充填体5は、通常、連続した板状若しくねだ円状として構成するのが好ましいが、所要に応じて、充填体5の一部分のみを磁性材料から構成することもできる。

また、上記の通りにチューブ1'2に充填体5を嵌め込んで、それを眼鏡部1の形状に成型する場合は、充填体5は最初荷重に優れる

(6)

材料から構成することが好ましいが、

ユーブ1aに充填体5を完全に嵌め込むためには、ナユーブ1aが充填体5に比べて延展性に優れるものから構成するのが好ましい。

例えば、第3図に示す如く、管状チューブ1a中に線状材から成る充填体5を嵌め込む場合は、これらの間に空隙が存在すると、その周囲に形成される磁界が乱れ、磁気が漏洩して好ましくないが、チューブ1aの中に線状の充填体5を空隙なく整合させて嵌め込むことは不可能に近い。むしろ、チューブ1aの中に充填体5が嵌め込まれたときは、その間に、多かれ少なかれ空隙若しくは間隙が存在する。この場合、チューブ1aが充填体5に比べて延展性に優れていれば、チューブ1aの中に充填体5を嵌め込んだ状態で、更に所要の圧延成型することによつて、チューブ1aは伸ばされて空隙をほとんどなくすことができるほか、包帯体1aの肉厚も薄くすることができ、とくに、包帯体1aを貴金属から構成する場合は、貴金属が節約できて

(7)

等を除去して、第4図(c)の如く、一体にする。また、これを例えれば眼鏡部1の如く環状に構成する場合は、プレス等で環状に成形し、その端部を密接し、所要に応じて熱処理後、着磁すれば良い。

なお、充填体5を着磁する場合は、その周囲に少なくとも2個の極をおき、その上で着磁すれば、容易に環状の磁性体が構成できる。

以上詳しく説明した通り、本発明はフレームの少なくとも一部に着磁された充填体を嵌め込んで成るものであるから、着用したときに、充填体からの磁気が眼の周囲の血管等に作用し、血液の循環を促進して疲れ目等が生じることがない。

また、第2図に示す如く、つる2の一部に充填体をねじ込むことができ、この場合は、第4図(c)の状態のものをつるのよう構成すれば十分である。

4 図面の簡単な説明

第1図ならびに第2図は本発明の一つの実施

好ましい。

また、充填体5は磁性が大きいものは成型性が損なわれるが、例えば、Cr、Co等を含む鉄系合金等は、着磁性に優れると同時に成形性に優れて好ましく、また、たとえ成形性の悪い充填体の場合でも片状のものとして充填すれば容易に所望形状に成型できる。

また、上記の如く、チューブ1aの中に充填体5を嵌め込む場合に、種々の組込み法が考えられるが、チューブ1aの端から充填体5を差込み、そのローラ等をかけて所望形状に圧延成型する。この場合、チューブ1aの断面形状は、後記の充填体5の断面形状よりやや大きく形成し、例えば、充填体5の形状が、三角形、四角形若しくは一部が円弧状のものであつても、チューブ1aの断面は、円形状に構成する(第4図(b)参照)。その後、このチューブ1aの一端から、充填体5を挿入し、第4図(a)に示す如く、組合わせる。その後、組合わせた状態でカリバー付ローラ等によつて圧延し、例えば、間隙4

(8)

例に係る眼鏡の斜視図であり、第3図は眼鏡部の一例の一部を断面で示す斜視図、第4図(a)、(b)ならびに(c)は眼鏡部等の製作過程の説明図である。

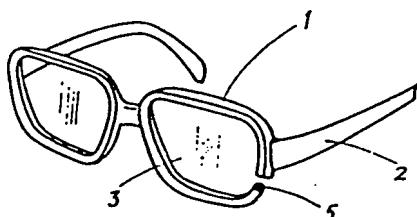
符 号 1 ……眼鏡部 2 ……つる
3 ……レンズ 5 ……充填体

特許出願人	徳 田 忠
代 理 人	弁理士 松 下 義 动
	同 潤 川 幸 天
	同 潤 川 敏

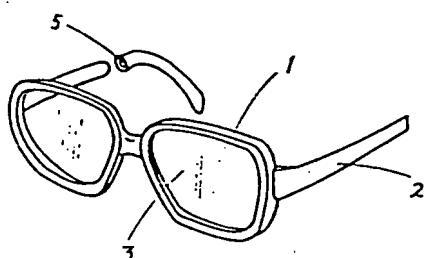
(9)

00

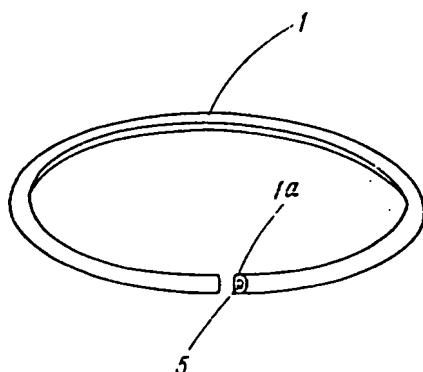
第1回



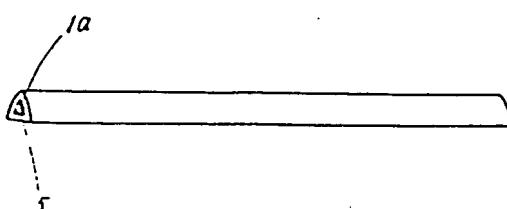
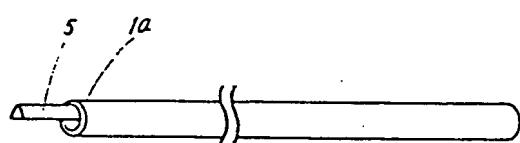
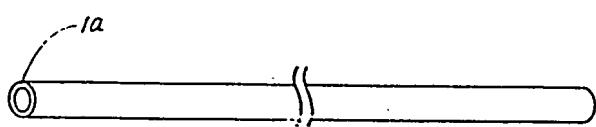
第2回



第3回



第4回



手続補正書(方式)

昭和54年2月16日

特許庁長官 須 谷 卷 二 殿
特許庁審査官

1. 事件の表示

昭和58年特許出願件番号123664号

2. 発明の名称 国鏡

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

居所 東京都渋谷区代々木5-15-10-402

名称 増田 昭
代表者

4. 代理人

住所 東京都中央区銀座3丁目11番5号
▼104オニ中山ビル3階電話(50)77625-7615

氏名 (7610)弁理士 松下 稔勝

5. 補正命令の日付 昭和54年1月30日

6. 補正により増加する発明の数

7. 補正の対象 図面(第4回)件許

8. 補正の内容 別紙の通り



414

